Blade of Memories

FT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌａｄｅ　ｏｆ　Ｍｅｍｏｒｉｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ１１０５Ｚ

【作者名】
ＦＴ

【あらすじ】
幾度の戦争の果て、「西暦」というものが過去の物となり「宇宙移民暦（Ｓ．Ｉ）」に移行した未来。
数多くの人々の努力の末、火星にまで生活圏を広げることに成功した人類は新たな可能性に歓喜していた。
だが、火星への移民が進むにつれ徐々に表面化する地球側と火星側の対立。
地球圏の支配者層による火星への圧政が招いた大きなうねりはやがて火星圏全域を巻き込んだ独立運動へと発展していき、ついに地球・

火星両者の武力衝突を引き起こす。

S．I30年……後に『火星圏独立戦争』と呼ばれる戦いの始まりであった。

プロローグ

「西暦」……この暦が過去のものになってすでに三十年以上の時が過ぎようとしていた。

西暦２１００年を過ぎたころから人口の増加による環境汚染が深刻化、さらに天然資源の枯渇などが合わさり世界中で資源確保を目標とした競争が激化していた。

それでもまだ世界は表面上は安定を保っていた。

大量破壊兵器である「核兵器」の抑止力によって。

しかし、その核による平和も２１００年代初頭に突然終わることとなる。

「核兵器を完全に無効化する特殊粒子である『核反応停止粒子』に関する最終報告書」と題した研究報告書と詳細な製造方法、そして「核反応停止粒子」のサンプル品が何者かにより世界中にばらまかれたのだ。

製造法はすぐにインターネットでも公開され一般家庭でも製造法を知ることができる状態にまでなった。

最初はどこの国も核を無効化する粒子などという話には懐疑的であった。　もし本当にそんな特殊粒子を開発した国なり組織があったとしてもわざわざ公開する理由がない。

製造法を秘匿し、自分達のためだけに活用すれば得られる利益は莫大なものとなったはずだからだ。

だが実証試験の結果、この特殊粒子の理論と製造法が正しいこと、そしてそこから作られる「核反応停止粒子」は核兵器を無力化するに十分な事が証明されてしまった。

この日を境に世界情勢は大きく変貌する。

核反応停止粒子の製造法が世界各国に知れ渡ってしまっている以上、核の抑止力も急速に力をなくした。

世界各国は歩兵や戦車、航空機と言った通常兵力を増強し、世界各地で紛争が激化。　先行きの見えない時代へと足を踏み入れて行く。

これらの世界的混乱に対する解決策を人類が見出すのはあと十二年ほど先のことである。

西暦２１５５年４月、国家間の摩擦と軍事的応酬が増加していた当時としては数少ない国際機関であった「国際宇宙開発機構」は新技術の開発に成功。

以前より環境汚染と人口増加の問題に対処できるとして提唱されていた宇宙空間への進出と地球周辺にある安定軌道にコロニーを設置する人類の地球外進出計画、これがとうとう実現可能な段階まで来たのだった。

「国際宇宙開発機構」は世界中の国々に「一致団結し次なる時代の扉を開くべし」との声明を発表。

同時に人類を宇宙へと移民させることを目的とした「フロンティアプロジェクト（Ｆ計画）」への参加を呼び掛けた。

宇宙開発により生まれる利権や利益を狙い世界中の多くの国が「国際宇宙開発機構」への支持を表明、戦争に使われていたエネルギーは宇宙への進出を目指す準備に向けられはじめる。

西暦２１６３年１月１日、人類史上初めて宇宙空間での居住を可能としたコロニー「フロンティア１（ワン）」が稼働を開始。

十億人規模での移住が開始され、人々は半世紀以上続いた不安を

忘れようとするかの如く新たな時代の幕開けに歓喜した。

ここからの１５０年間はまさに絶頂期と言ってもよかった。
次々とコロニーが建造され、宇宙への移民が急速に進み地球環境も改善へと向かい始める。
また資源を豊富に含んだ岩石（アステロイド）から金属などレアメタルを取りだす技術の確立など資源問題に関する問題も解決することに成功した。

西暦２３３０年代に入ると火星への進出がスタート。
火星を人の住める惑星へと変える「テラフォーミング計画」が本格化し西暦２３４５年には火星の約半分が人類の居住可能空域へ変化し、５年後の２３５０年には火星全域が居住可能となり本格的な火星への移民がはじまった。
またこの西暦２３５０年を人類の新たな出発の日とし、西暦から宇宙移民暦（Ｓ．Ｉ）へと紀元が改めら西暦２３５０年をＳ．Ｉ１年とした。

順調に進むかにおもわれた人類の宇宙移民……だが火星への進出は新たなる争いの火種となった。
その火種が大きな災いを呼ぶのはＳ．Ｉ　１年から数えてあと三十年後のことである。

火星への移民が始まり二十六年ほどが過ぎたＳ．Ｉ２７年。
この時期になると火星圏にもコロニーが多数建造され地球圏とほぼ同じような生活を営めるほどに社会構造・物資流通の両面が安定化した。
そしてその安定化とほぼ同時に起こったのが火星圏独立運動である。

最初は火星の物資や資源とそれに伴う流通・利権などを独占して

いた地球に本拠地を置く「国際宇宙開発機構」や火星進出に莫大な予算をつぎ込んでいた地球の先進各国に対する反対運動から始まった。
やがてそれが自治権を求める運動に変わり規模も拡大、火星圏に住む人々の大多数は火星に自治権が認められることを渇望するようになる。

この運動に対し地球側は「秩序を乱す行為」と自治権を求める運動を批判、嘆願書などもすべて一蹴するという行為に出た。
火星に住む人々が反地球という流れの中でまとまっていくことに危機感を抱いた地球の国々は地球の国家間の結束を強めることを名目に国家の統合・再編に乗り出す。
だがこの行動すら統一を推し進めようとする「地球圏独立国家共同体」―通称ＥＣＩＳ―と呼ばれる国家群とそれに反対する地球圏自由同盟―通称ＥＦＵ―の間に埋めがたい溝を作ることとなった。
やがてその溝は修復不可能なまでに広がり、地球圏の国々は二つの陣営に分かれ覇を競い合うこととなる。

地球圏統一戦争と呼ばれることになる戦争の始まりだった。

一方、火星では地球側が統一戦争に陥ったのを好機と判断した火星独立推進派が火星圏の各コロニーや火星各都市をまとめ上げアリアフィス議会を結成。
さらに地球側の支配力が戦争により衰えた隙をつき、アリアフィス議会が中心となって海賊行為・テロ行為への鎮圧を名目に「火星治安維持隊」という独自の武装組織を作り上げる。
この行動は地球側から多くの非難を浴びることとなるが統一戦争の真っ只中であった地球側には既に火星圏を統治しきるだけの余力は残されていなかった。

翌年のＳ．Ｉ２８年、約１年続いた統一戦争はＥＣＩＳ理事国を中心とした陣営の勝利で幕を閉じ、ＥＦＵも解体された。
統一に反対する組織がなくなったことにより統一は順調に進み同年十二月に「地球統一政府」の発足が宣言された。
しかし、地球圏各地にはいまだ投降を拒否したＥＦＵ残党軍が数多く潜伏しており情勢は予断は許さない状態であった。
そのためアリアフィス議会や火星治安維持隊などの火星圏における懸案事項への対処は後回しとなる。

Ｓ．Ｉ３０年２月７日、自治権を求める運動はとうとう独立運動にまで発展し最高潮に達していた。
ようやく統一戦争終結後の混乱から立ち直った地球側は火星での独立運動の機運を潰すための行動を開始する。
地球に最も近い火星圏陣営の小規模コロニー「ハーフフロンティア１７」で行われた独立を求めるデモ鎮圧を名目に地球統一政府は国軍である統一軍を派遣、ハーフフロンティア１７の武力制圧を画策する。

この動きを察知した火星側は開戦を決意、アリアフィス議会を最高意思決定機関に置き火星を中心としてそれに連なるコロニーを含めた主権国家「アリアフィス共和国」として独立を宣言した。
それと同時に「火星治安維持隊」を解体しアリアフィス共和国の国防組織「ミスディア」へと発展する。
地球側の派遣軍を万全の体制で向かい打ちたいアリアフィスは独立宣言と同時に火星に僅かながらいまだに駐屯していた統一軍への奇襲作戦を行い速やかにこれの駆逐に成功。

そしてＳ．Ｉ３０年４月１７日１５時４０分。
ハーフフロンティア１７にてついにミスディアと統一軍両軍が初めて砲火を交えた。

後に「１７会戦」と言われる戦いの始まりである。

戦闘開始当初、急ごしらえの武装や旧式の艦艇を使いながらも兵力数で勝るミスディアは最新鋭の装備で固めた統一軍相手に五分の戦いをする。

しかし統一軍が新型機動兵器ＡＨ（エーエイチ）……「Ａｒｍｓ　Ｈｕｍａｎｏｉｄ」を投入し戦況は一変した。

ＡＨが搭載する強力な新型ＥＣＭにより既存の誘導兵器はほとんど通用せず、さらに全長も七メートル前後と小さく、小回りが効くので運動性能の面でも従来の宇宙空間用戦闘機である「航宙機」より有利に立ちまわれた。

ＡＨに対する効果的な対処手段を持っていなかったミスディアは一方的にやられていく。

三〇機のＡＨ「バイアス」が戦列に参加してから三〇分足らずでミスディアは戦線が維持できなくなり後退を開始。

追撃を受けたミスディア側の戦艦・巡洋艦・駆逐艦などの艦艇も高速で近接戦闘を仕掛けてくるＡＨに対して旧式の火器では対応しきれず次々と沈められた。

戦闘開始から二時間を過ぎたころ、ミスディアはこれ以上の戦闘は無駄と判断。

ミスディア派遣軍総司令官ジャック・ハーランド中将判断のもとでコロニーに取り残されていた民間人の収容完了と同時に戦域から撤退した。

この戦いにおけるミスディアの損害は統一軍の被害と比較すると航宙機隊は約４倍、艦艇数に至っては約７倍もの損害を受け、軍事的な面では統一軍の完全勝利で幕を閉じる。

だがミスディアが一般人に死者を出さずにハーフフロンティア１７の住民をすべて救出したという事実は軍事的な結果以上に火星圏

の民衆に評価されることとなる。
無論、大敗から目をそらさせようと過度に宣伝したという側面もあったがその行い自体は英雄的なものであった。

統一軍の方ではこの勝利によって新型機動兵器ＡＨの宇宙空間における有用性が揺るぎないものであると判断。
今後は航宙機から開発の主軸をＡＨに移すことが決定され、地球統一政府はＡＨを主力とした部隊で火星で独立を宣言したアリアフィス共和国への出兵を計画する。

１７会戦から丁度６カ月後の同年１０月１７日。
地球から火星独立派掃討を目的とした大規模な統一派遣軍が火星圏へ到着、同時にアリアフィス共和国に正式に宣戦を布告する。
統一派遣軍は火星への降下作戦を行うため、橋頭保となるエルム宙域と言われている火星圏の要衝に侵攻を開始する。
この時の統一政府は今回の出兵が勝利で終わると確信していた。
ＡＨを大量増産し、そのほかの戦力も１７会戦の時とは比べ物にならないほどの数であるのがその確信の理由である。
しかしこの確信は脆くも崩れさる。

アリアフィスは１７会戦での敗北後、地球側の侵攻を想定しいくつかの建造途中のコロニーを要塞化し火星圏の戦略的要衝に配置するという方針を立て実行に移していた。
ミスディアの艦艇・航宙機も火星に本社を置く「ジェネラル・マーズ」社をはじめとする独立支持派企業の協力の元に一新されていたため統一軍の予想を上回る防衛力を発揮したのである。
しかし強力なＥＣＭを備えるＡＨに対抗できる兵装の開発までは間に合わず、対ＡＨ戦においては以前と同じく苦戦を強いられる。
だが１７会戦に引き続き防衛軍司令官となったジャック・ハーランド大将指揮の元で統一軍の補給用部隊を撃破し、継戦能力を奪う

ことにより辛くも撃退に成功する。
これがのちに第一次エルム会戦と呼ばれる戦いである。
そして、この戦いから二年の月日が流れた……。

＊　＊　＊

火星外縁にはマーズコロニー１５……「テヘラ」と呼ばれる辺境のコロニー群がある。
火星と地球、二つの陣営に分かれ戦争をしている最中だというのに辺境にあるがゆえに戦火を免れ、どこか平和な雰囲気が流れていた。
マーズコロニー１５の首都とも言える一番コロニー「テヘラ？」にはテヘラ中央大学という名の大きな大学が存在している。
意外なことに辺境にありながら火星圏においては高い教育水準を誇り、設備も充実している質の高い大学であった。
改装したばかりなせいか大学全体が小奇麗であり、全体的によく整備されていた。
そんな大学のキャンパスの一画に設置されたベンチに腰掛け、一人黙々と本を読んでいる整った顔立ちをした黒髪の少年が居た。

「よう、シュン。　相変わらず適当に涼みながら読書か？」

読書を楽しんでいた黒髪の少年『シュン・キリサワ』は自分の名前を呼ばれたことに反応し顔を上げる。

「あれ？　ダンがこんなところを一人でぶらついてるなんて珍しいね」
「何、ちょっとシュンに用事があってな。　とりあえずこれから暇か？」

顔を上げたシュンの前には赤毛が目立つ友人『ダン・ニムドロフォー』が居た。
シュンはダンの「暇か？」という問いに対して静かに頷く。
「ならよかった。　バスケクラブの連中から助っ人やってくれって話が来ててな。　風邪で欠員が出てすぐにでも三名ほど人手が欲しいそうだ」
「そこで僕に三名の内の一人になれってお誘い？」
「そういうこと。　俺とシュン、それにあとでリョウを入れて丁度三人だ。　助っ人料は弾んでくれるってバスケクラブの連中は言ってるぜ」
「多少報酬に色着いたとしても僕はあんまり気が進まないな……」
ダンから助っ人の話を聞いたシュンは明らかに気乗りしないと言った感じだった。
シュンの口調や雰囲気からダンもそれを察する。
「あんまり乗り気じゃないって感じか。　まぁ俺もお前があまり目立つ場に出るの好きじゃないの知ってるから無理強いする気はないぜ？　」
「もしも僕が出ないって言った場合、助っ人が一人足りないことになるけど誰か他に当てはあるの？」
「いいや、誰もいない」
自信満々にシュン意外に助っ人の当てが無いことを宣言するダン。
余りにも気持ちよく言うので思わずシュンは笑ってしまった。
「そういうことなら可哀想なんで人数合わせ手伝うよ」
「いや、本当すまんな。　今度何か礼する」

顔の前で手を合わせて頭を下げるダン。
他に当てもないと言うならせっかくの友人の頼みだし仕方がないということでシュンは助っ人の話を受けることにした。
なんとなく「きっと僕以外に他の当てなんて無いんだろうな」と助っ人の話を切り出された時点でシュンは思っていたのでどちらかというと案の定と言った感じだった。
シュンとダンはバスケットボールの試合が行われるコートへ足早に向かい始めた。

時にS・I　32年5月3日、この日のテヘラはまだ平穏の中にあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1105z/

Blade of Memories

2011年12月4日02時50分発行